計算機言語講義資料 第5回 C言語

大阪大学 大学院情報科学研究科 2015年 長谷川亨 t-hasegawa@ist.osaka-u.ac.jp

Small C言語

C言語のサブセットであるSmall C言語を定義して、仮想計算機の機械語への変換を学ぶことで、プログラムの意味を理解する

Small C言語のC言語との差異

- 基本データ型は、void型とint型のみ
- 構造型は、一次元配列型とポインタ型のみ
- 記憶クラス指定子(static, externなど)、型修飾子(constなど)はない
- 宣言において、初期化はできない
- 関数定義において返り値は、void、int、int *****
- 一次元配列の要素の型は、intまたはint *****
- 文は、複文、式文、if文、while文、break文、return文のみ

Small C言語のプログラム例

```
int i, n;
int f(int i) {
   if (i>0){return i*f(i-1);}
   else {return n+1;}
}
int main (void) {int x;
   i=5; n=3; x=f(n);
   printf ("%d \ n", i+x);
}
```

仮想計算機

仮想計算機

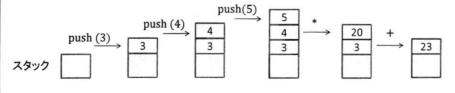
- Small C言語の中間コード、すなわち仮想計算機の機械語を実行する 仮想的なスタック計算機

スタック計算機

- メモリがスタックの形式になっている計算モデルを
 - ・ 実行時スタック(テキスト4.4.4節参照)をメモリとして持つ
 - ・ スタックのトップを演算レジスタのように用いて計算

機械語への変換例

- 逆ポーランド記法(後置記法)による式 345*+
 - push (3) push (4) push(5) * +



機械語命令

機械語命令 SC-コード命令と呼ぶ

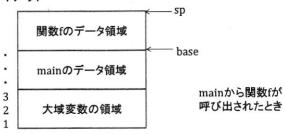
- 命令コード オペランド の形式

命令コードオペランド

仮想計算機のメモリ領域

- メモリ:機械語のプログラムを格納するためのメモリ
- スタック:実行時スタック

スタック領域のレイアウト



関数のデータ領域とレジスタ

- 関数のデータ領域
 - 制御情報領域
 - 戻り番地(RA)と動的リンク(DL)
 - DL この関数を呼び出した関数のデータ領域の起点(base)のスタック番地を指すポインタ
 - 引数領域 仮引数に割り当て
 - 局所変数領域 局所変数に割り当て
 - 作業領域
- ・ 3つのレジスタ
 - pc (プログラムカウンタ)
 - base (ベースポインタ)
 - sp (スタックポインタ)

作業領域 局所変数 引数 制御情報

SCコード命令のインタプリタ

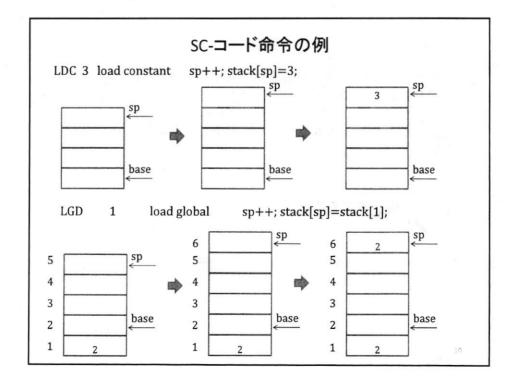
```
スタック 一次元配列 stack[]
                             例) int stack[10000];
   - stack[1] スタックの底のセル
  レジスタ pc
              int型の変数
                            例) int sp;
  レジスタ base int型の変数
                            例) int base;
  レジスタ sp
              int型の変数
                            例) int sp;
int main(void) {
int code[2000], operand[2000], stack[10000], sp, base, pc, op, a;
read; /* SCコードプログラムを読み、code[]とoperand[]に格納 する*/
base=1; pc=1;
op=code[1]; a=operand[1];
while (op!=HLT) {
 pc=pc+1;
 execute; /*命令 op aを実行*/
 op=code[pc]; a=operand[pc];
```

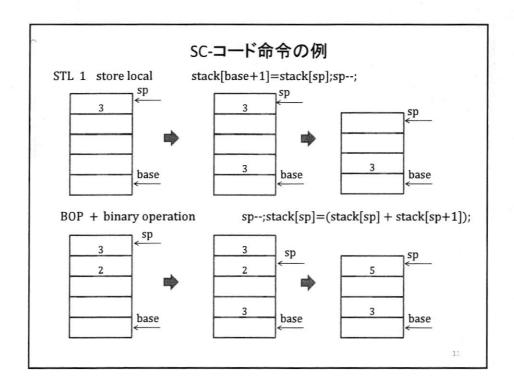
SC-コード命令

```
LDC a
            load constant
                            sp++; stack[sp]=a;
LLD a
            load local
                            sp++; stack[sp]=stack[base+a];
LGD a
            load global
                            sp++; stack[sp]=stack[a];
            load local address
                                    sp++;stack[sp]=base+a;
LLA a
STL a
            store local
                             stack[base+a]=stack[sp];sp--;
                            stack[a]=stack[sp];sp--;
STG a
            store global
                            pc=a;
UPJ a
            jump
FJP a
            jump if false
                            if(stack[sp]==0)pc=a;sp--;
```

SC-コード命令

ENT a enter block sp=base+a; stack[sp+1]=base;sp=sp+2; MST mark stack CUP a call user procedure stack[sp-a]=pc; base=sp-a-2; pc=stack[base]; RET a return from function sp=base-a; pc=stack[base+2]; base=stack[base+1]; sp--;stack[sp]= BOP a binary operation (stack[sp] a stack[sp+1]);

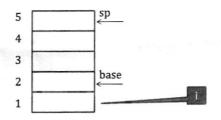




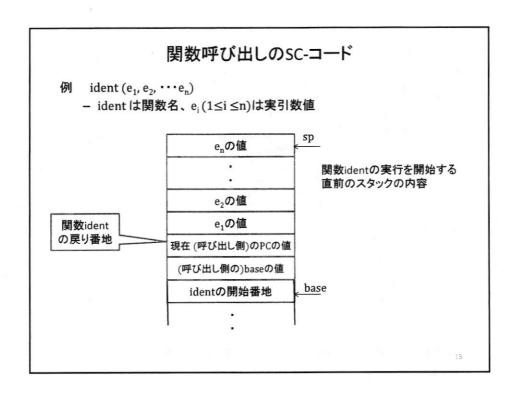
問題

演習【11】整数型の大域変数iを宣言したとき、i=3+4*5; の演算から生成される機械語列(SC-コード命令列)を求めよ。

ここで、大域変数iは、stack[1]に割り当てられているとする。 (ヒント)式3+4*5を後置記法(逆ポーランド記法)に変換する。



12

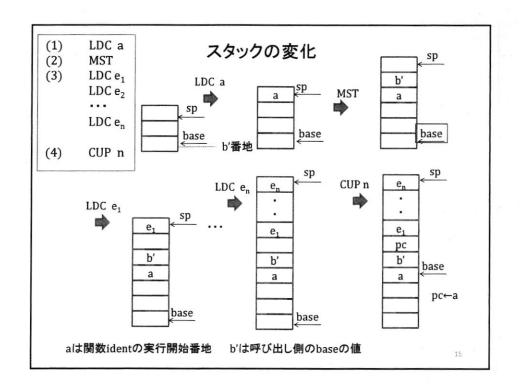


関数identの関数呼び出しから生成されるSC-コード命令

- (1) LDC a /* aは関数identの実行開始番地*/
- (2) MST
- (3) LDC e₁ /* e_ilはコンスタントとする */ LDC e₂

LDC e_n

(4) CUP n /* nは引数の個数を示すコンスタント*/



関数の実行終了後の戻り return e; の実行 /* Small C言語 */ - (1)式eを実行する - (2)式eの実行結果をstack[base]に格納する • stack[base]は、呼び出された関数の実行開始番地と格納と、戻り 値の格納の両方に用いられる - (3)この関数を呼び出した関数に戻る e_nの値 • SC-コード命令 RET a SC-コード命令列 (戻り値がある場合) e₁の値 e₂の値 STL 0 呼び出し側のpcの値 RET 0 呼び出し側のbaseの値 式eの実行結果 16

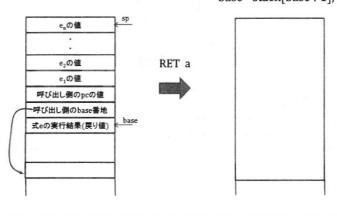
問題

【演習12】 RET aにおいて、関数に戻り値が無い場合、a=1 で、戻り値がある場合、a=0である。

戻り値がある場合に、RET aを実行した後のスタックの内容を示せ。

参考RET a return from function

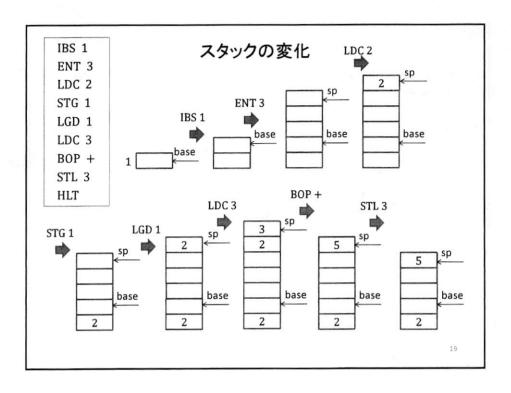
sp=base-a;pc=stack[base+2];
base=stack[base+1];



関数定義とその呼び出し例1

Small Cプログラム
int n;
int main(void) {
 int x;
 n=2; x=n+3;
}

SC-コードプログラム 大域変数の確保 IBS 1 局所変数の確保 ENT 3 LDC 2 定数2をロード STG 1 大域変数nに格納 nの値をロード LGD 1 LDC 3 定数3をロード スタックのトップと2番目の値を加算 BOP + STL 3 局所変数に格納 HLT



関数定義とその呼び出し例2 SC-コードプログラム Small Cプログラム ENT 3 IBS 1 a_f: int n; LLD 3 ENT 3 a_m: int f(int i) { LDC 2 LGD 1 return i*n; STG 1 BOP* LDC a_f STL 0 int main(void) { MST RET 0 LGD 1 int x; LDC 3 n=2; BOP+ x=f(n+3);CUP 1 a₀: STL 3 HLT

